九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

”The Beast in the Jungle’’ における abyss

砂川, 典子

https://doi.org/10.15017/6789531

出版情報：九大英文学. 42, pp.117-125, 1999-12-01. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

“The Beast in the Jungle”における abyss

砂　川　典　子

I

“The Beast in the Jungle”（1903）は、自分が何か恐ろしいことに遭う運命にあるのではないかという不安に取り憑かれた男の物語であり、James 作品後期のいくつかの作品の基調音である、“the wasting of life”、あるいは、“too late”のテーマをめぐる作品の１つに数えられる。James は、the New York Edition の序文に見られるように、自作を解題することを全く厭わなかった作家であったが、この物語についても、作品の主題について明快な説明を与えている。

> Such a cource of existence naturally involves a climax－the final flash of the light under which he reads his lifelong riddle and sees his conviction proved. He has indeed been marked and indeed suffered his fortune which is precisely to have been the man in the world to whom nothing whatever was to happen.[1]

しかしながら、“The Beast in the Jungle”は、James が説明したような、最後に用意されているカタストロフに直線的に向かうのではないように思われる。２人の人間が謎をめぐって、互いに推し測りながら、絶え間ない逡巡を繰り返す。世紀末に、Nietzsche は、「怪物とたたかう者は、みずからも怪物とならぬようにこころせよ。なんじが久しく深淵を見入るとき、深淵もまたなんじを見入るのである」[2]と箴言を発したが、この短編は、まさしくその「怪

物」と「深淵」を意識において探っていく物語である。

Jamesの後期の小説の形式を支えているものは、「意識のドラマ」といった言葉に代表されるような、推量、推論、知覚、想起、といった精神作用の描写であり、“intrusive author”、すなわち、「侵入的な作者の声」といった、全般的な作者のよる注釈、説明はめったに挟まれることはない。物語は、登場人物達の間で交わされる微妙なニュアンスに満ちた会話と、視点的人物の意識を通してでしか伝達されないのであるが、この短編において、その手法は最大限に活かされていると言ってもよいであろう。

この手法によって、密林に潜む獣のように主人公を待ち受けているものは何かという探究のドラマは、弛緩せずに、その緊張感を持続しすることが出来る。そして、主人公の相手の女性が、核心部分については、「〜ではないもの」というような曖昧な否定形でしかほのめかさず、名づけることに限りなく躊躇し、ひたすらその周辺を迂回するかのように見えるため、読者は、秘密が明らかになる瞬間まで、主人公と謎を共有してしまうのである。本稿では、Jamesの後期小説の特徴を踏まえながら、“abyss”をめぐって展開される意識のドラマを検討したい。

II

この短編は、主人公のJohn Marcherが、パーティーで10年ぶりにMay Bartramに再会することから始まる。2人は、以前ナポリで若干の付合いがあったが、この交流がお互いに残した印象にはかなり相違が見られる。Marcherの方は、記憶もあやふやで、2人の間には何かが欠けており、“communities”というものが全くないように思われ、思い出せないというもどかしさも感じられるのであるが、Mayの方は、彼の記憶の誤りを逐一訂正し、彼が忘れていたことを内容まで覚えていて、再会するまでに何度も反芻していたと言う。

> the sense of being kept for something rare and strange, possibly prodigious and terribly, that was sooner or later to happen to you, that you had in your bones the foreboding and the conviction of, and

that would perhaps overwhelm you. (69)

Marcher のオブセッションは、遅かれ早かれ彼の身に起こる何か恐ろしいことは何かということであり、May がその秘密を知っているということ、あるいは、彼女がその恐ろしいことを知っているただ一人の人間であるという確信が、2人の間の距離を急速に接近させ、彼女を、他人に近かった友人から、マーチャーの秘密の共有者であり、見張り番に変える。2人の交流は、彼の恐ろしい運命をめぐって再び始まるのである。

以後、この問題は、始終二人の間で何かの符号か謎かけのように繰り返され、2人はお互いの言ったこと、もしくは言わなかったことについて推論を重ねていく。David Lodge は、James の後期小説に特徴的なこのような文体について、以下のような説明をしている。

> The story is unfolded in a series of scenes or dramatic encounters between the main characters, in which the issues of the plot are discussed or alluded to in dialogue. The import of what is said is often obscure or problematical, and the effort of interpreting it is depicted in the consciousness of the central or focalizing character, rendered in prose of great complexity and delicacy of nuance.[3]

これは、全く "The Beast in the Jungle" を解釈していく体験を説明しているといって差し支えないであろう。Marcher と May の間で交わされる会話は、ほのめかしに満ち、不明瞭このうえない。こうして、彼の探究は、徐々にメイの存在が不可分な要素として介入してくるが、この二人が秘密をめぐって推論している過程は、冒頭で述べたように、文字通り、深淵の距離と重さを、意識において「測る」、あるいは「量る」という試みに他ならないのである。

III

密林にうずくまる獣のように Marcher を待ち伏せしている恐しい運命を、

彼は、May に会う以前から、それこそ生まれてからずっと感じてきたのであり、知覚しようとしてきたのであるが、彼女もその見張り番として関与してくる。

> He was at all events destined to become aware little by little, as time went by, that she was all the while looking at his life, judging it, *measuring it*, in the light of the things she knew, . . . (80) (Italics mine)

彼女は「それ」を、「測る」（あるいは「量る」）ことを試み、そのようにして、彼の人生に関わってくるのであり、とうとう彼が彼女の存在を位置づけようとする時、いったいいつ彼女が彼の考えの内部にまで入ってしまったかたどることができなくなってしまう。しかし、Marcher は、2人の間の交流、あるいは「親しみ」といったようなものに心地よさを感じながら、それと同時に、自分の名付けようのない不安、強迫観念に彼女を巻き込むことは、「自己本位」ではなかろうか、そして、更に言えば、彼女をただのうちあけ相手としてしか利用としていないのではないかという利己主義を自分に感じる。

> He had kept up, he felt, and very decently on the whole, his consciousness of the inportance of not being selfish, and it was true that he had never sinned in that direction without promptly enough trying to *press the scales on the other way.* (90) (Italics mine)

Marcher は、利己主義に傾きそうになると「天秤の片方に重りを乗せて」、良心に申し開きをするかのように釣り合いをとろうとする。このことは、実際には、May をオペラに連れ出したり、誕生日に彼の財力にしてはやや高価な贈り物を彼女に贈ることで、埋め合わせをしようとすることに表れている。彼は、絶えず釣り合いを求める、あるいは釣り合いが取れているかいないかを気にする性格であり、それは、彼の自己評価である「公明無私」、「無私無欲」と齟齬をきたしている。そして、この意識的、あるいは無意識的な自己欺瞞は、彼女の老いと病気、死に臨んで顕在化し、むしろ、利己主義の方が、

前面に現れてくる。例えば、彼は、彼女の死が訪れた場合、自分に親友を失うという損失が生じるが、その「釣り合い」を取り戻すという意味で、「あのこと」を見届けないうちに彼女が死んだら、彼女の方が損ではないかと考える。また、例のカタストロフは、彼女の死を意味するのではないか、もしそうであれば、それは、自分を待ち受ける運命にしては、いかにも「惨めすぎる結末」ではなかろうかと不満のようなものを持ち、さらに、それは、自分の運命にしては卑小で「釣り合わない」とすら考えてしまうのである。

Ⅳ

距離、あるいは深さを「測る」ことについて、それは「深淵」と「橋」というイメージが与えられる。

> It was into this going on as he was that they replaced, and really for so long a time that the day inevitably came for a further sounding of *their depth.* These *depth*, constantly *bridged* over by a structure firm enough in spite of its lightness and of its occasional oscillation in the somewhat vertiginous air, invited on occasion, in the interest of their nerves, *a dropping of the plummet and a measurement of the abyss*. (92) (Italics mine)

この彼らの"abyss"とは彼らの共通の秘密を指すのであろう。そしてまた同時に、May と Marcher の間を暗示するものでもある。あるときから、彼は、彼女が自分に先んじて、「あのこと」を理解したのではないかと疑いだし、「知っている」のだが余りにも恐ろしいので口に出さないのではないのかという確信を持つに至るのだが、彼女が知ってしまったことと、老齢と病気によってもたらされた変化によって、Marcher と彼女は、精神的に乖離始めてしまう。ここでは、重さではなく、２人の距離がいかに離れてしまったかということが、"she communicated with him as across some gulf or from some island of rest that she had already reached, . . ." (99)と直喩によって示され

ている。

しかも、Marcher は、May に「あのこと」は、彼の気づかないうちに、もう起こってしまった、彼のそばを通らなかったのだと聞かされるのである。

> "Well" --- she did her best for him --- "not from this side. This, you see,"she said, "is the other side. . . . "We might n't, as it were, have got across --- ?" (112)

この会話の趣旨は、不明瞭である(Marcher 自身はよく認識していない。「こちら」も「あちら」も同じようなものだと彼は答えている。)。しかし、これは、前述の「深淵」と「橋」に照らし合わせて見るならば、「あのこと」に対するある認識に到達しえた、知覚を得たことを意味するのかもしれないが、二人の間の距離も考慮に入れねばならない。あの「深淵」は、2人の「深淵」でもあり、また2人の間の深淵でもあったのである。彼らが、孤独に、お互いを覗きあえないようなものとして存在しているという存在の形式、彼らはこの上ない親しさ、親密さで持って数十年つきあいを続けてきたにもかかわらず、埋められない距離が存在するのである。またさらに、その「深さ」と「重さ」は、

> . . . but this proved, this *bottomless drop* was concerned —the last time of their life. It rested on him with *a weight* he felt he could scarce bear, and this *weight* it apparently was that still pressed out what remained in him of speakable protests. (112-113) (Italics mine)

となる。かつて、Marcher は、その「深淵」に重りを投げ入れてその深さを測ってみたいと思っていたのだが、逆に彼女の死を前にして、その「底の知れない降下」は、この時をもって最後になるのかと絶望し、以前あれこれ「あのこと」を推測していた頃は、". . . if drop it could, by its own august weight." (99)と考えていたにもかかわらず、その「重み」に耐えられなくなっていることがわかる。

この短編は、6章立てで、1章から5章までは、Marcherの未来への不安に取り憑かれた意識の発展と、彼とメイとの間で交わされる微妙な会話と、2人の推量からなっている。6章では、彼女の死後、独りになったMarcherが、アジアを訪れたりもするのだが、いっこうに楽しめず、全てが薄っぺらでむなしく感じてしまうところから始まる。[4]彼の心は知らず知らずにロンドン郊外の墓地へと吸い寄せられるようになっていて、彼女の墓を訪れた時に、いよいよその"beast"、何も起こらなかった、遅すぎた運命と出会う。"He had seen *outside* of his life, not learned it within, the way a woman was mourned when she had been loved for herself ; . . ." (124-125)、つまり彼が人生の「外側」に来て知ったものは、Mayが差し出した「抜道」（つまり彼女を愛するということ）を、それとわからずやりすごしてしまい、待って待って待ち続けるという掟に縛られた運命であった。彼は、「あのこと」が彼に跳びかかってきた時、つまり、彼女が彼にぎりぎりまで推測させようとしていて、2人の間がもっとも接近していたあの午後の時を永遠に逸したことに気づいて、打ちのめされてしまう。[5]

V

"The Beast in the Jungle"の萌芽は、1895年の *Notebooks* に遡ることが出来る。

> What is there in the idea of Too late of some friend—ship or passion or bond—some affection long desired and waited for, that is formed too late ? I mean too late in life together.[6]

この創作テーマは、"The Beast in the Jungle"にはかなり忠実に反映されているといってもよいが、こうしたいわゆる"passion"の不在を中心にすえた作品にもかかわらず、作品が、読むことにおける強度を持続させているものは理由は何であろうか。それは、「野獣」と名付けられた何ものかを探究するというプロットが生み出すサスペンスであるかも知れないし、「人生の浪費」と

対極にある、James 的な「生きられるべき人生」という、作家のモラルが、最終的に感じられるからかも知れない。しかし、この作品のサスペンスは、主に、“intrusive”、あるいは“authorial”な語りが排除され、推論や知覚、あるいは、認識といった、視点人物の精神作用の軌跡が、小説の言説に重なり合うことによって、読み手における解釈の比重が、Marcher の意識におけるそれとほぼ等価になることから生まれるように思われる。[7] まさに、読者には、Marcher が感じているような経験、つまり、James が小説を読むという行為が、読者に提供すべきものと考えた、“felt life”が与えられ、「天秤の片方に重りを乗せて」解釈の比重を測り続けるという体験が、小説の強度を持続させているのである。

註

1. Henry James, “The Beast in the Jungle,” *The Novels and Tales of Henry James,* New York Edition, vol. XVII (New York : Charles Scribner's Sons, 1937) preface, xi. 以下本書からの引用文はその直後に（　）内の数字でページ数のみを記す。
2. F. ニーチェ、『善悪の彼岸』竹山道雄訳（東京：新潮文庫、1993）122.
3. David Lodge, *After Bakhtin : Essays on Fiction and Criticism*(London : Routledge, 1990) 130.
4. May の死後、Marcher が行なったアジア旅行について、John Carlos Rowe は、“The nirvanic calm governing the East's distant gaze on the vulgarity and triviality of times reflects with proper irony Marcher's own life-denying resentment of time and becoming, of passion and otherness : of himself.”と述べている。John Carlos Rowe, *The Theoretical Dimensions of Henry James*(Madison : Wisconsin, 1984) 249.
5. この「密林の獣」について、スティーブン・カーンは、Conrad の *The Hart of Darkness* (1899)と比較して、自身の外部に意味を探し続け、最終的に自身の内部に内なる虚無を見いだす Kurt と Marcher の類似性を指摘している。スティーブン・カーン『空間の文化史—時間と空間の文化：1880—1918年／下巻—』浅野敏夫・久郷丈夫訳（東京：法政大学出版局、1993）56-58.
6. Leon Edel and Lyall H. Powers, ed., *The Complete Notebooks of Henry James* (Oxford : Oxford UP, 1987) 112.
7. ウェイン・C・ブースは、『フィクションの修辞学』、（東京：白馬書房、1991）348-349

において，Marcher の物語が感動を与えるのは、彼の自己中心癖が最初から最後まで徹底しているにもかかわらず、読者はものの見方において、Marcher を通して見るが、道徳的見方は終始 James のものであるために、作品のあらゆる局面で、Marcher の自己中心癖の欠陥を読者が判断すべきだと James の主張を感じるせいであるからだという見方を提示している。